

【第2回 丸子の渡し祭り 会場案内図】



【丸子の渡し 歴史メモ】

古くは「まりこのわたし」とも言われ、平安時代の延喜式や鎌倉時代の「吾妻鏡」にも出てくる「丸子の渡し」。天正18（1590）年、徳川家康の江戸入府後、江戸と平塚の中原を結ぶ中原街道が整備され、江戸への玄関口として重要な役割を果たすようになりました。

その後、東海道五十三次（川崎宿）が整備されると脇往還となるも、江戸への近道であったため、急ぎの旅人や品物の輸送に重宝がられたということです。

橘樹郡上丸子村、荏原郡下沼部村両村持合いの三艘の船が常備されており、大きさも下流の六郷の渡しに匹敵するものであったといわれ、また、渡し場付近（中原街道）には、30軒ほどの集落があり、渡しを利用する人たちで賑わっていたと記録されています。

大正9（1920）年の多摩川新堤防工事により、今の丸子通周辺に集落ごと移転されられ、昭和9（1934）年から昭和10（1935）年にかけて、丸子橋架橋により廃止されるまで、丸子の渡しは東京往還の冠動脈であったといえます。

このたび、対岸である大田区区民有志とともに、これらの渡し場の検証、中原街道往還の歴史、文化を改めて認識し、後世に語り継ぎ、その足跡を残すべく、「丸子の渡し復活協議会」を市民団体および関係行政との連携で立ち上げた次第であります。

多くの皆様のご支援、ご協力を心よりお願い申し上げます。